一　大正十四年十二月一日（第三種郵便物認可）　昭和二年五月廿五日　平新報　第三十三號

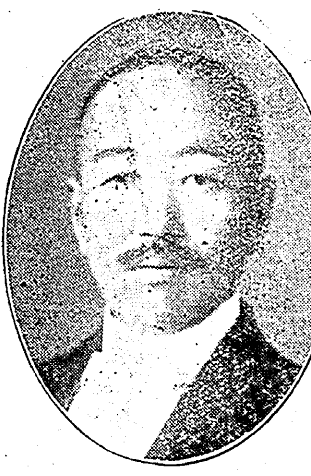
平新報

發行日每月三回五ノ日發行
編輯兼發行印刷人 山野邊庄吉
發行所 福島縣平町南町七七 平新報社
廣告料 五號十二字一行一回五十錢 場所指定倍增
送料共定價一部金十錢

即吟

新妻喜男

畔道にたはむる
ひなの子をみれば
里の子戀し
信濃路にして



桐谷文平氏

氏は目下平町胡摩澤に在りて平與國會、平禁酒會等の會長又平陽實科女學校の名譽校長を力められて居る
氏の磐城中學校長としての在職期は故西村岸太郎氏の後にて大正三年拾月より同十年三月迄にて爾後本縣社會課に行かれたのである

希望

桐谷文平

五月五日は我が磐城中學の創立紀念日で、此際私にも何か感想を述べよとのことであるが、過去を顧み將來を想へば無限の感想も浮ばないではないが、今特に取り立てゝ言はんとする事もないので聊か私の希望を述べることにする。

會て**故雪人**西村先生は赴任忽々敎育會で平凡主義とかの講演をして、其內容如何なる事項に觸れしかは知らないが、兎に角其事が多數人の感情を害して、爾來兎角不利なる位置にあつたと傳へられて居る。私の述べんとする所も誰れしも氣附ける平凡なる希望であらう。然し恐く何人も斯くありたひと思ふ事であると信ずる。

第一 **我磐中**は石城地方に於ける青年男子の唯一の敎育機關である、大きく云へば其最高學府であり文化機關の中心であり、且中心たらねばならぬ位置にある。學校當局の覺悟も責任も實に爰に存すると思ふ。元より當局の胸には之が爲めには諸設備が如何にも不足であり不充分だと云ふことが直に浮ぶに相違ない。然し大體より見て縣下の大校であり新建築であり、形式上相當の設備もあること故、之を利用して可成敎育を一般民衆に公開する方法を講じて益々地方文化の進展に貢献することに努めて貰ひたい。外部に對する敎育は內部の敎養を助成するものであるから學校にとりても決して損の行くべき道理はない。然し外に對する文化の普及と內に對する敎養の整理とは必ずしも一致せない場合がある。それは其方法と時機と當を得ざる所より起るので現に世間往々有勝のことであるが、當局に社交性に富める人々の揃ふたときはやゝもすれば內部の整理を疎かにしがちとなり、所謂人氣策にのみ腐心し、世間には一寸見えないが甚しく敎育の眞諦より遠ざかり、實は恐るべき結果を遺すことがある。又反之獨善主義の人多きときは敎育は內容の整理が主なりとの見地から籠城主義を採り却つて內部より崩潰することもある。此內外の整理を程善く調制して行くことは却々困難な事で其何れに偏しても失敗は免れない。庶幾くは我磐中の賢明なる當局は克く內外何れを主とすべきやを石城地方の狀況殊に人心の趨向を察せられ、內には一千の青年の情勢を見て適當なる敎育法を採られんことを切に望むのである。第二に學校と同窓生とは云はば親子の因緣であり善き友人の關係にあるので、常に學校當局の敎育に都合よき樣後援し、其非は之を被ひ其善は之を彰はすべきで、時として若其非なるあらば之を世間に表はす前に忌憚なき忠言をなすべきだと思ひます。

又**同窓會**自身としては一種の社會敎育に貢獻するのが事の自然であり又當然と思はれます。卒業生諸君は石城地方の知識階級であり、文化の指導階級であり、其行動は一般大衆に對する模範階級であるからです。私は數年間縣に居りて地方改善とか町村改良とかの事業に關係したのであるが、地方町村の實情を知れば知るほど其善方面よりも寧ろ其惡方面ひんそくすべき狀態が展開され、一般大衆が概して無自覺、惡く云へば無知無能とも云ふべき事項が多いのに氣付き又動もすれば二三策士の爲めに籠絡左右せられ、或は壓迫せられ又香餌のために眩惑せられて居ることが如何に多いかに驚いたことである。又地方**青年が**口には自由平等とか自治とか正義とか唱へながら實際し實情に於ては如何に不正義を認容し、如何に不自由不平等が公然大道を濶歩し、自治が却て官權官僚の指揮に依賴することの多きかに驚いたのであつた。自治改善の前途は遼遠なることを悲しんだのである。斯如き實情であるから、今日社會改造とか改善とか色々の方面に叫ばれるのであるが、結局は町村と云ふ一自治體或は一部落と云ふ一小團體の改善から着手せねばならぬと感じたのである。卽ち

汝の隣人を愛せよ　或は隣人を改めよと云ふ

のが總て社會國家改善の根本でなければならぬ。徒に大衆を集合せしめて大聲疾呼するも勞多くして効少きをつく〴〵感じたのである。一人の至誠熱烈なる行動が先づ其隣人に及び次第に他に波及し善化するのが一番遠きやうで然も近道であると思ふ。社會改善や自治改良に興味を有し之が實際運動に從事せんと志した私は既に時期か遲かつた。今や心身老境に入つて志事と違ふ許りである。同窓生諸君は何れも氣鋭新進の方である。此事業は單に私の如きが唱へたる所以のみではない、恐く總て指導階級の人が努むべき道であると思はるゝので是非諸君に御願したたひと思ふのである。殊に**同窓會**員は今や各町村に少くも二三名、多きは數十名にも、達して居る所がある。中には他鄕に出でゝ居る人も相當あらうが、鄕村に留つて居る者も決して小い數てはあるまい。此等諸君は皆其家業のために忙はしいであらうが隣人の指導卽ち諸君の鄕村の善導に努むる餘裕が全くないとは云はれまい。若し諸君が結束して文化の改善普及に努力せらるゝならば蓋し其効果は目覺しきものがあるに違ひない。結束とは申しても初めから範圍を廣め多數を糾合して一事業を經營しやうと思ふと勞力と時間と費用との關係で行詰が出來易い。殊に同志も多數となれば異論も區々で兎角實行が出來難いものである。小數でも熱誠なる眞の同志が少き範圍より確實に始めるのが成功するやうに思はれる

現に**某氏の**如きは自治改良農村改善を標榜して雜誌を發刊した、氏自らは實に熱誠東西を奔走した。當時私は餘り手廣くすることの不可なるを說き、氏自らの鄕村を確實に其手に收むることの先つ必要なることを注意したのであるが、氏の青年的元氣は廣く廣くと手を延はしたので世間に所謂三號雜誌の跡を辿るの不幸を敢てしたのは實に最近の事實である費用關係を有する事は愼重になさぬと取返しがつかなくなる。

玉川村の**齊藤君**などは其所信を宣傳するに實に忠實であり勇敢である。日々多忙なる生活をなしながら遠く夜分平町まで來て其所信を街上で披歷して居る所謂辻說法救世軍式の野戰である。氏は街上に群る公衆に對して眞の日本人たる自覺を喚起せしむべく努めて居る。其熱誠は洵に敬服する所である。其信仰の差異は强て問ふべきではない氏の熱誠なる努力は決して之を輕視嘲笑單に傍觀すべきではないと思ふ。私は今や病體にして氏を援助する事の出來ないのを深く遺感として居る。又夏井村は一の難治村なることは世間周知の事と兼てから聞いて居た。政黨政派の弊害が單に公共の事のみでなく私交上の吉凶事にまで浸み込んで居り、公正なるべき青年の會合や婦人の集會にも及んで居ると聞いて居る。然し恐く斯の如きは獨り夏井村のみであるまい、廣く縣下を見渡すと頗る其數が多いと思はれる。然るに長らく在京生活をして居た同村の同窓**鈴木君**が歸鄕せられ、同君は以前より之を憂ひて居たので何とかして同村の融和を計らんと專念し、先づ比較的惡弊の及ぼさざりし寺院關係方面より着手せんと考へ、同村數多の寺院に共同事業を行ふことを勸誘し、去る四月九日釋尊降誕會を期して花祭りを行ひ、兒童を中心として漸次其父兄の融和に及ばさんと努力した。さきには東都講話界の泰斗たる久留嶋氏を聘して村民の啓發を行ひ、今又同界の大家岸邊哲人氏を招聘して再び啓蒙せられ効果は覿面未だ多くの時日を經ないが、近時青年男女は勿論一般村民が次第に寺院に依賴し來る傾向を生じ來りしが如く、今後氏の運動の基礎を作られたる觀あるに至れりと云ふことである。氏の如き社會敎化事業に趣味を有し且深き經驗を有せる士が劃策しつゝあれば必す近き將來相當の効果をもたらすべきは明かである。之は獨り夏井村の幸福のみならず其影響が必ず大なるものがあらう。殊に氏の事業に何等毫末微塵も不純の動機がないことは一層其事業をして成功せしむる所以であらうと信ずる。從來此種の企てをなしたる人はないではないが、多くは其裏面に、名譽とか、利得とか、兎角不純分子が含んで居る事が多かつたので何時かは何かに表はれて失敗すること、が多く總て社會事業や敎化事業には動機の純粹潔白と云ふ事が最重要事である。斯く同窓會員中には町村により種々なる事業に從事しつゝあるのであるから、之を開知せる同志は其事の文化的なり產業的なるとを問はず、直接間接にも同志の事業に決して惡聲を放つことなく所謂相互扶助式に之を應援して其大成を計らしむべきだと思ふ。して其事業は互に報導して相互の參考に供し又援助の資となすべきで、斯るための有線無線の電信となるは本紙主幹山野邊君が喜で其機關となることと信ずるので、此點より又山野邊君の事業を援助せられんことを希望する。

「四月二十五日稿終」

斷想

綠雨生

清新溌溂たる生々躍動の自然の姿を表現してやまぬ新綠の世界は現前に展開された。

うら若き女性の　いやが上にも美はしく見える季節である。裏二階の冷靜なる哲人も、たそがれ時　さまよひ出でゝ　ショオ、ツイ　ンドオの衣裳に心奪はれる今日此頃である。

河畔の葉櫻の下、タバコくゆらし乍らポツネンと野面を見る。一陣の輕風　戀人の手の如くわが頰を愛撫して吹き去る。

あゝわが青春廿の紅夢は吹き去つた一陣の輕風の如く　何處へ逝つてしまつた。

戀すべく餘りに老いたる　闘ふべく餘りに疲れたる自分を　しめやかに省み、こみあげ來る哀感　怒濤となつて吾心を蔽ふ。

いづれは儚なき人の生の旅路である。心臟の行進曲は刻一刻　冷土墓門へと。

有限の人生に無限の慾望を抱いて生々流轉する吾人の運命を嘲笑したくもなる。

奈翁の雄圖も、鈴木の富　カイゼルの世界政策も　クレオパトラの美貌も　一片の幻影だ、空中樓閣だ。

私はニヒリストの心を抱いて　俯して流水を　そして行雲を仰いだ。（五、十三記）

日蓮上人と名の研究

玉川村德藏院

安藤嘉信

上人は其著聖愚問答抄下卷に最も痛切に名の大切なことを力說して居られる、今そのホンの一部分を摘錄してみよふ。

前畧　法華一部の功德は只妙法等の五字の內に籠れり一部八卷文々ごとに二十八品生起かはれども首題の五字は同等なり譬へば日本の二字の中に六十餘州島二つ入らぬ國やあるべき籠らぬ郡やあるべき飛鳥と呼べば空をかけるものと知り走獸と呼べば地を走る者と心得る一切名の大切なる事蓋し以て是の如し天臺は名詮自性句詮差別とも名著大綱とも判ずる此の謂いなり。又名は物を召す德あり、物は名に應ずる用あり、法華題名の功德も亦以此の如し

南無妙法蓮華經　合掌、

人間の名の重大なもので決して輕々しく取扱つたり考へたりすべき性質のものでないことは私共の常に渾身の勇を振つて力說して居た處であることは既に磐城の天地に於ても滿一ヶ年半これを以て大にしては國運の盛衰小にしては個人の運命にまで及ぼすことは日本といふ國名からと政界要路の人々の名から考へて本年は財政問題を中心として若槻內閣倒壞田中內閣の出現することを本紙一月號に豫告し置いた事實でも既に本紙の讀者諸君は御承知のことゝ思れるので今更クド〳〵しく說明の餘地もなく又古聖の遺言には日蓮上人に限らず殆んど枚擧に遑なきまでにこの重大な點を敎示されて居ることでも疑ふの點なく御諒解の出來ることゝ思はれます私は全生命の精力を盡して物名…人と名この運命關係の研究を續くる既に多年更に永遠に研究の歩みをつづけるつもりで居ます、私共の研究の成果名と運命の關係を信ずると疑ふとを問はず忌彈なき質問を觀迎します、是れは天下識者の批判に訴へたいと思ひます。

社告

上遠野大藏
伊藤正美
右入社ス
平新報社

片寄氏の慶事

目下築館中學校敎諭たる片寄政直氏は去る日深谷ミヨ子孃と華燭の典を擧げた。因みに新郎は磐中十八回卒業生にして柔道四段、新婦は磐城高等女學校出身にして四ッ倉町藥種商深谷留吉氏の才媛であると。

安藤師の選名

壽一郎、泰孝兩君と倫子さんの誕生

左の人々過日誕生されたので運命大學院第二支部長たる玉川村大原德藏院住職安藤嘉信師が選名された。

■磐城時報發行人 岡田弘成氏長男 壽一郎
■東北實業新聞社長 吉村白水氏次男 泰孝
■磐城立憲新報社長 小泉宗雄氏二女 倫子

赤インキ

本紙前三十二號紙上左の記誤植につき正誤す

◎一面
一、磐中同窓動靜欄中第十二回の死亡者中大森充久とありしは義久●●
二、同じく第十三回白土與平は子郎●
三、收入役高木保は助役●●
四、賛援者の濟藤晃は齊藤●

◎二面
一、東京覗きと其印象欄中『九牛●の功を、一簣●にかゝぬ』は九仭●の功を一簣●に虧かぬ』と
二、廣告中森合齒科醫院の横田町とありしは植田町

磐中同窓活躍誌刊行を賛援す

十八回 大浦村醫學士 木村守江
磐城セメント四ッ倉工業所
五 同 愛川信太郎
九 同 根本龜吉
十五 同 渡邊金之助
十九 同 草野亥子治
二十四 同 草野壽男
二十五 同 北川秀雄
二十七 同 金成龜清
十八 四ッ倉銀行勤務 吉田都廣
支那山東省博山 博山鑛業公司
十六回 管波豐
十七 四ッ倉町 佐藤勇
十六 上遠野村 大野元
七 同小學校長 江尻融
十 上遠野村 鈴木龜之助
廿二 同 小澤貞久
十二 磐崎第二小學校訓導 小泉義浩
內郷村磐城炭礦
十六 醫學士 小名濱小學校 野田宏
廿二 小名濱町 訓導 中野文六
十六 菅原道一
廿五 內郷村第二小學校訓導 廣木春正
廿四 同 窪田輝
廿七 內郷村第一小學校訓導 三浦幸雄
廿四 同 矢野幸造
廿五 同 小野澤勝次
九 內郷村第三小學校長 堀一郎
十四 訓導 高木憲平
廿二 同 鈴木保
廿一 同 小泉文好
廿三 湯本小學校訓導 岡部政一
廿四 同 山崎三良
一 好間小學校訓導 鈴木榮治
好間村古河炭礦會社勤務
十一 川島忠通
好間村小田炭礦勤務 門海美城男
二十 好間村小田炭坑 吉江飯場 吉江孝慈
好間村小田炭坑 松田純一
同 松田家一
十二 平水道課試驗所主任 松井深
廿三 慶應大學 山崎忠兵衛
十二 平大工町磐城炭礦發電所勤務 酒井爲吉
十 平水道部勤務 本多麟太郎
十二 同 藥谷國平
十六 內郷村磐城炭礦勤務 永久保赳
廿二 同 田村五郎
廿三 內郷村第四小學校訓導 鈴木辰雄
廿四 同 石森正雄
十八 同 山崎富次郎
廿三 同 和田二郎
廿六 同 鈴木一寛
廿七 同 菅波芳作
廿五 同 吉田校
廿二 同 大須賀百世
十八 植田町眼科醫院 鈴木熙
廿二 同町荒物商 長谷川安一
八 同町助役 小野忠衛
五 久ノ濱小學校訓導 猪狩甚三郎
廿四 同 千葉喜孝
廿三 同 林又左工門
十五 双葉郡廣野驛前 根本一良
十五 同郡廣野村酒造業 根本龜治
十二 同郡同村小學校長 木田茂平
十四 江名町々會議員 吉田正雄
玉川村大原德藏院住職 安藤嘉信

平新報の發展を賛援す

植田町長 佐川龜太郎
久ノ濱町 堀部留造
江名町 役場吏員一同

文化的指導原理なき　平町の現實を凝視して

安藤文憲

近來の平町は—、十七八世紀（吾朝豐臣德川期）英佛にあつて貴族と稱する有閑階級の横暴、一般民衆の享樂と、吾武士と云ふ衆民の上に位する（德川三代家光以降は追々勢力を失ふた）勢力が血腥いそして武張つた事から段々かけ離れて空位を擁する丈で横暴を極めてゐた、その間に彈壓されつゝも經濟的に充實した民衆は支配階級にある武士よりも生活力に於て優れ其餘剩のハケ口を享樂に見出した—。のと世相を等してする觀がある。

昭和現代の生活意識が豐臣德川期卽ち十七八世紀と共通した文化過程にある。が悲し哉彼桃山、元祿時代に比して現在は一貫した力強い精神的宗敎（僕は斯く云ひ度い、近代の宗敎は形式に囚はれて精神的に空虛である）と人格主眼の敎育がなく歐米文化模倣の二重生活に苦しみ餘裕がない、彼の桃山、元祿時代の抑壓された民衆の生活意識は必然的に耽美、享樂にはしり私娼窟や遊女町（廓）や歌舞伎芝居などではしいまゝに自由を賭つてゐた、彼等は素人藝の天狗を氣どり廓や遊場の艶バナシに興ずる事が誇りであり日常生活であつた樣に今の青年の日常生活のうちに新田町南町鎌田の艶話に暇をつぶし自他共に解せぬ猥言めいたものを誇る素人藝の天狗がある　浦賀灣頭驟然の科學警報に平和の夢破られて國內喧騷去就に迷ふ程であつたが今や國際關係は紛糾して歐米各國の科學的壓迫に累卵、の危さ以上にある、徒らに外來思潮に囚はれて頑迷なる者を指嗾し煽動して喰物にする如き不埒極るものと云はねばならぬ、今は爭ふ時でない、整然勞資協調國富に力を致すべきであるが町當局に自主、自立の方策なきは如何？寄生木「炭坑」を喰物とし或は賴りて一部の利益、生活の爲に大衆の迷惑困却を思はぬ民衆も殆んど直接ならぬ限り單に事件、問題として以外に一顧を與へぬには不思議とより考へられぬ、亦一方に肺結核豫防を絶叫しながら他方花柳病の瀰漫を恐れず取締ろうとはしない、如斯變態心理は種々方向を過つて公園池鯉魚食となり隣接炭坑爭議傍觀となるのではないか。

要するに結論は平には愛町の士がないのである。

紳士道を冒瀆して君子の假面を被ぶり
弱者の經濟慘虐を常習敢行する
古田儀太郎（假名）を彈擊して猛省を促す

惡魔は假面を被り、妖女は粉裝を凝らす。而して現代の假面非紳士は巧言令色口に人道を唱え、青年に修養を說き乍ら、彼れが一度假面をカナグリすてゝ、その木性を暴露するや、腐肉を啖ばむ鳥の腹よりも黑惡なる邪惡の獸人と化して、花街に二八の美少女を手折り、貧巷に無產者の生活を脅威し、魔王の如く猛り狂ひ、白日の下尚ほ、我コソは天下の模範紳士と…大道を橫行濶步するに至つては言語同斷、心外千萬の次第ではあるまいか。

是よりがき出づる本文主人公

僞君子 古田儀太郎コソは正に社會的正義確立の爲め民衆的制裁擁護のため神聖なる筆劍を振つて、彼れの猛省を促さねばならぬ似而非紳士の代表人物である。

古田は平町に於けるブルジョアである。私有財產數十万をもつ、その大半は東京に陰蔽して脫稅の奸手段を企つて居る。民衆は拾万位と評價するけれ共…實際は數十万ある。

彼れは貧家に生れ、つぶさに貧乏の苦難を體驗したその青年時代に於ける彼れが惡戰苦鬪の

血淚史 は一篇の哀史であると共に又成功美談とするに足る。

彼れは天下の大山師星某を尊敬し、敬するに星先生と稱する。彼れはクリスチャンを以つて任じ…神の愛を高潮し教會新築に一片の献金をなしたる事を以つて最大至高の善行をなしたる樣に自家廣告してやまない彼れは數人の苦學生をコキ使ひ自己の事業に利用し…辛うじて一人の苦學生は某私立大學を終つた、がしかし、某は彼れの冷血に愛憎をつかし、學窓を辭するや敢然として彼れに反逆しおさらばをしてしまつた。

古田は町議、郡議等の名譽職もやつた事もあり、而も現在は

某會社 の重役までして居るけれども、唯一人の子分すらなく、人望さへあれば町長にも縣議にもなれる一角の人物であり乍ら、鄕里政界に於ける、人望殆んどなく將來政界の活躍絕望を先見するや一轉して、極端なる守錢奴化して金錢の前には義理人情あるなく無情冷血なる金魔となつた。

彼れ若し鄕里の政界に志を得たならば、鄕土又彼れをして志を得せしめたならば、彼をして自巳の人格的欠陷に目覺むるの明あつたならばかゝる幾多の反定がなかりせば、彼れは、もう少し人間味豊かな紳士となつたかも知れない。

（つゞく）

【公憤生投】

磐城中學校
同窓動靜（三）

磐城セメント會社四ッ倉工業所勤務中の磐中同窓生は左の如くである。

五	職工係	愛川信太郎
九	販賣係	根本　龜吉
十五	會計係	渡邊金之助
十九	健康保險組合主任	草野亥子治
二四	試驗係	草野　壽男
二五	同	北川　秀雄
二七	同	金成　龜淸

植田町長 決定

馬上町長辭任後の植田町長は揉みに揉んで居つたか今回以前町長たりし佐川龜太郎氏が選ばれ就任した

鐵脚縱橫

東京覗きと其印象（二）
再び星、小林兩君にもの申す
主筆　山野邊眞立

筆者眞立は本紙前號紙上に東京覗きの其印象として、先づ會はざる星一氏と星社の營業部長代理と稱する、小林讓三郎君と會見上の概略の印象を報じた。

先にものした通り筆者は近親者の搜查のため出京したもので、一方拾年も御無沙汰せる磐中時代の鶯淸等君に朝鮮より歸省後一回も挨拶して居らぬので、それが舊情を溫めんために星社に勤務中の同氏を訪れ序でに、目下本社にて刊行準備中なる磐中同窓活躍誌の贊援をうくべく星社勤務の磐中同窓諸君に其贊意を求めた事は事實である。

筆者はかつて比佐昌平氏と共に鄕土の生んだ政治家、實業家として相互に助けねばならぬを力說したる事は、昨年十月五日附の本紙第二十號一面上段にものして居つた、同じく同號二面に磐城時事研究會の帝都視察に上るを報じた時に、筆者は都合ありて上京しかねた。

その企てたるや、カタむかんとする星社の代辯を共に配心する、石城鄕土人に力めやうとする親切心の一端であつたのである。それと等しく序でながらも筆者が星一氏に會見を求めたは同樣なものである。

然るに彼星その人は何と觀察してか、多忙との一言に同社を三回も訪問せるものに無雜作に拒絕した……。

次いで

小林讓三郎 君に對する印象を再びものすれば、彼は何が故に自ら星一それ自身の如く、勝手な、潛越な、橫暴なる處置をとるか、星氏に會見を求めた折は確に驚君より小林君それから星氏に名刺を通逵せる事は事實であるが、その前の筆者への應言放語は正しく親しみのない、遠く上りし文化業者を侮辱せるものである。敢て今更めてその語尾をとらへて云々はせぬがあまりに、彼は人を見下げて居りはせぬか人は自ら偉がらずとも偉きものは偉きとして敬するものである。星一氏にして然り。筆者は大臣やその地の他鄕の人を訪れて門前拂をくつたなら、何も痛痒を感せぬ。

然し石城出身にして實業家である、星氏への會見たるや如何なる理由たるや自ら先生偉人と曰ふも判る筈あるまい。

後日磐城配給所の駒木根君が同社に出社せる所江尻功造君の如きは、○をくれろならくれろと申しらよいではないか、なんだ先生の事をあんなに書いて、東京の大新聞もかゝざるに……？　山野邊が今度來たらフクロたゝきにしてやると申したとか。

江尻功造君、いやしくもこの眞立は君等の如きにドヤされてビク〳〵して文獻事業に當つて居られぬ要するに小林君は個性あるだらうがまだ〳〵人格がレイファインされて居らぬ。

筆者は決して星、小林その人を攻擊すべくものしたものではない。晉々上京中の最もなる印象であるからである。

例へば永砂糖の場合に於て低溫工業式の冷凍法では理論としては成功しても、實際上どうなるか位は專門技師たらずとも判り切つて居る化學理上の事ではないか、それが證據にあるホテルで公開したサンプルの如き巨大な結晶塊は……どんなものか……引いてそれに置時計を係の技術者に贈れる如き筆者それからそれへと噂サが事實である事を思ふ時如何に吾が鄕士の先輩たる星その人のために代議士候補の折と申し、逆つて彼が初めて代議士たりし時、社債でむごたらしい婦女子の經濟まで虐められつゝあるを思ふ時——彼が目的がどうであつても手段をあやまり自家の成功を急いで株主や鄕土人に思ひをはせなく、今日の社債不還の醜態は時、財界不況なるが故に云々とはあまりに巳れの力量を知らずして、人の褌で角力をとつた否なとつて居ると云ふ事は釋明の餘地あるまい、最後に言ふが眞立は決して、家庭的に惠まれなかつた氏を知る、故に彼の個人の裏面は云々せぬが今後とも事公の問題については嚴正批判の筆を進めてゝ徒らに彼の咏方のみして民衆、株主をして一時の心安めの筆はとらん心算である。

星氏たるもの現境を打開してよりよく生きんとせば乳臭き筆者の苦言にも眞理の含むを知つて善處されん事を切望する。

又小林君たるもの所謂取卷が星をあやまらしむるの識りながらしめよ咄！

活耳目

◆玉川村の丹野秀治君、かつて一年前投書に依る三錢ポスト欄に掲報した冷酷すぎるとの記事について、何かその○○が自分の事と憶測して今尙ほ根に思ひ女見たいにくだらなき事を言つて居るとの事である。自分に心當りがあるからだとし又○○が丹野君としたら社會上重大な問題である。

筆者は當事投書あり故大字島に出張して事實を調査の上確めた故シンシヤクして特に、○○として反省を促して居つたのだ。然るを自ら反省せず本紙が何か？虛事でも報せし如く執念にもツラミとするなら、事古きに屬するが新しき事まで當事の事をアカラ樣に掲げる事とする。君の決心を聞きたい一步讓つて君が例の○○報道が君の事と君が認めて騷ぐなら直接筆者に當るなり、取消するなり男らしき、文化的な、紳士らしい行動をなすべきである、方向違いの方へ當るは一寸卑怯であらう。

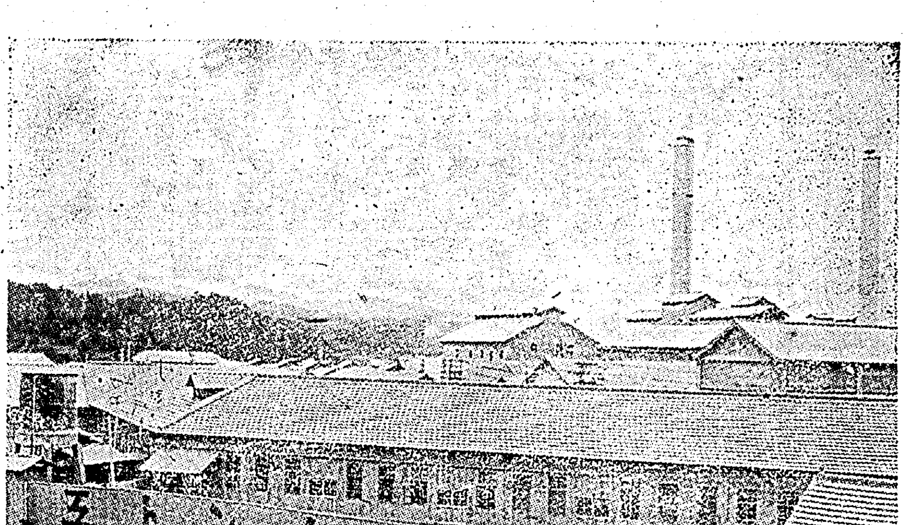
◆植田の×××君がかつて本紙花柳記事の××家の○子が、植田へ電話をかけた事についてヤーさんとして「××」としたは甚だ迷惑するとして、憤慨して本社記者や其他に當つて居るとの事…植田の××と申せば君位だらうが、安良町には君の外に××と稱する人も居るし、平には××の姓の人は一人や二人じやない。アマリ神經を尖らす事は…色男らしくない××○務や××長とのむは××を名乘るは君一人のみじやない

◆平町の××○○女學校長の××○○君、本紙昨年に於て記念號を出せる際君の事寫眞をのせてものして居つた、君は所が書き方足りぬ應援の格に比してはだと僕にコボした事がある、一體君は新聞記事が、金錢の多少により筆を進めると思つて居るのか、如何に勘定に達者な君としても新聞記事までソロバンにのせられては痛み入る、此の筆法で生徒の作品に手當をやらぬ事は當を得ぬ、のみならず依頼者からは相當料金をとつて居るじやないか、湯本方面のみならず、各父兄からの非難が多い。加いて身が教育者にありながら人の攻擊は聞きにくい、此際內省一番君の過去現在の言行を省みて…教育者らしくあつてほしい。其校生徒の修身課を擔當する君がアマりに今日の禮を知らず答禮をせぬ事が度々ある、帽子を取らざる禮が何處にあるや、吾人は君の如き教育者が弊陽の斯界に在るを思ふと泣きたくなり、婦女子の教育上に惡影響するを憂ふるものである、そう偉らがらずとも人は偉きものはエラクするからネー…。筆者と申せど知らぬ折は欠禮する事もある然し如實に直面して君等の禮法は何法と申すのだ！君等には口で注告するもキ、メあるまい、敢て紙上を以つて世の批判を俟つ事如件

◇肺病豫防宣傳ビラ撒きの自動車が、馬糞や塵埃を卷き立てゝ步いた。皮肉も甚しいもの撒水車のない平街としたら小學兒童の力でもかりて、宣傳した方が適策なのである。當局のやり方は事每に効のない事が多い樣である。

岡眼八目
長谷川生

○○町の○○校長は教育者として十有餘年教育方面に於て溫厚篤質の士と稱せられて居る。これは氏が常に於けれる努力の賜のと云わなければなるまい、だが校長と職員間の協調統一の取れて居ない事は、又格別である。苟も多數の兒童を教育せんとする重大な任務に在りながら、不見識極まる態度を發見される事は、教育者たる者の爲すべき態度であるまいと思ふ。校長職員間の協調の取れて居らない事は、校長が常に於けれる監督の行きとゞかない關係であるまいか…今後一層注意と反省を促したいものである。



收塵機を備ふ
磐城セメント 四倉工業所

多年問題中であつた四倉町に於ける磐城セメント四ッ倉工業所の灰粉は今回同會社が工事費拾五万圓を投ジて收塵方の工を急いで居つたが近く竣工運轉の由にて同機はコットレル式電氣收塵機と稱し飛粉九十パーセントを收め得る事確實との事なれば今後四ッ倉方面の草木の被害ば除かれる事となる理である。

磐城セメント代理店
平町五丁目
釜屋商店
平町二丁目
西村屋藥舖

內訌を絕排して
農會總代の改選を
一日も早く斷行ずべし

某紙の報ずる所に依れば農會總代の改選を行はぬで縣郡農會が統一に支障を來しつゝあるとの事である。うち石城郡では

玉川村 も、その部類に屬して居つた樣である。又實際行つて居らぬ、何が故に當然改選すべき四月末日に行はなかつたのであらふか、引いて聞く說くは玉川村農會では舊役員によつて今日農會費を集めて居る由である、筆者は常に力說する所であるが、農會そのものゝ必要も認める。然し農會そのものの仕事は町村役場になさしむべきである。次に農會長が町村長不適とせばその町村有力者を推戴するも可なるも、經費や其他の節約上農會の仕事は役場に當らしめば事務の進行は勿論農會費の徵收も順調に行くべきは事實が證明して居る。此處に一言したきは役場のなさぬ農會獨立になし居る村は不成績の樣であつて時折問題を醸しつゝある、所謂非役場派と稱する派はこの農會に立籠つて對抗する觀がある樣である。此の意味に於て筆者は經費の節約は勿論現役場の人員にて農會の仕事が出來得ぬといふ如き、役場に仕事多きものでないが、故に農會の仕事は役場になさしむべきものである事を力說するものである、若し從來の如く何等仕事をなさず無用の長物たるの農會ありとし常に、派に派をなして鬪爭これ事とする如きならば自治の發達に影響する事甚大なもので、農會の不用論者の出づるも無理からぬことであると思ふ。

內科、小兒科、皮尿科
藤[illegible]醫院
平町紺屋町
電話五〇七番

平町南町
[illegible]醫院
電話一二九番

高久病院
平田町　電五一三番

郷土先人の命名したる本來の名稱「仁井田浦」に還れ

仁井田浦を新舞子と稱して日本新八景及新百景の選に入れるべく四倉 大浦 草野 平の關係地方人が極力宣傳に力めて居るがその名を新舞子と稱したるは如何なる理由であろう、歷史的に地理的に「仁井田浦」ではないか、成田利生記や累解脫で有名な佛聖祐天上人の發祥地であり、勤王美談「小松嵐」で知られた、小松龍三の詩劇的場面、それは「仁井田浦」ではないか、何を苦しんで山川數百里隔つ關西方面より名を取るの必要があるか、模倣は事によりけりで今回の如きは鄕土先輩の命名したる本來の名稱「仁井田浦」こそ絕對の名稱と確信してやまぬものである。五月十八日記

在京磐中同窓を訪ねて
記者　藤田孝一

本紙發行附錄として刊行にかゝつて居る、磐中同窓活躍誌は目下材料蒐集中に付記者は去月二十二日山野邊社長に隨行して磐中出身在京諸君の動靜を伺はん爲遙々陛下の御在する大帝都東京市を訪れた。

社長と別行動に先づ一戰に市外田端なる大東製藥所の

新妻喜男 氏（四倉町出身）を訪れた氏の熱切なる後援により、道順を敎へられて、在京磐中同窓會の常任幹事

赤津誠內 君を牛込通寺町の病院に訪れる、時に午後四時面會を求めた。徒つ事しばし氏に初體面の挨拶をした。氏曰く『君が平新報の藤田とは』是が初體面の記者に對するあいさつであろうか。匹夫野人ならいざしらず、否匹夫には匹夫相應の禮儀がある。野人には野人の禮儀があらう。犬猫なら兎も角苟しくも彼は醫學博士の肩書を有する紳士である。夫共記者を侮辱しての言葉か、敢て借問せんとするものである。

然れ共記者は其んな事は敢てかまはず用件を質問した彼は一冊の在京同窓名簿を出して曰く『是れにて總てが判る、君と話して居つては飯にならぬ』と記者は或る人より同窓名簿を拜借携帶して居つた故、見る必要は無いと斷つた。

十分、二十分の面會で直に衣食住に事かくか、其共物質の云々によつて逃げ言葉か、二三十分の面會で食ふに事かく職業ならいさぎよくやめ給ひ。物質の云々ばかりではるばる彼一人を訪れるか、彼の最後の一言が氣に入つた。

在京東京名簿は一冊五圓の値打がある君の持つて居る持つてる代として五圓寄付しろだと、正氣かどうか知らねどもおそらく陽氣の加減での言葉だらう。如何に博士になつたとて昔を忘れる樣では駄目だ未だ〳〵勉强が——肝心——〳〵。

創立以來の本紙を讀んで居る筈だ、どうも有難う位申しても罰が當るまい——が呵……呵

次に

比佐昌平 氏の旅宿なる牛込區新小川町長生館に訪れた、氏は時節柄の多忙中にも拘はらず心善く記者の面會を引受けた、三十分餘の會見にて氏の快活なそして、上下の差別無く政治的手腕の豊富なのに記者は敬服してしまつた。氏の又政治に於ける日夜寢食を忘れ何等物質…を放れて善く其の職に盡力して吳れる熱心サに淚なき感謝の念を抱かずには居られ樣か、石城の生んだ政治家比佐氏の永久に代議士として鄕土の爲め活躍されん事を鄕人として、切に望むものである。吾人物質の云々何をか言はん相互に氣持ちである親しみである。應接であらねばならぬ。終りに臨み在京磐中出身諸氏の健鬪を祈る